

ampp-024

不／適／当／詩／劇

An Incongruous Poetic Drama

中田満帆

2024

a misssng person's press

そつと手をふるように
どつと血があふれる

中田満帆は読むことがスキヤンダラスでありうる数少ない詩人のひとりである。それは制度や法の反措定としてではなく、おそらくはかれの自己証明の方法論のラディカルさに起因している。

中田の詩では、多くの人、多くの場所、それらとの〈出会い〉、のみならずそれらとの〈別れ〉すらも、すでに失われ、あらかじめ奪われたものとして現前している。しかしそれはかならずしも他者の不在を意味しない。失われ、奪われたその世界から、かれ自身が不在になることで、想像によって構築された反世界を、いわば必然の運動として志向するものである。それゆえ、かれの詩では、自己の単独性を疑い得ない自明の前提としながら、失われた過去、奪われた未来、ありえたかもしれないもうひとつの生、〈Another life to live〉の行方を探し求めて、結局さいごに行方不明になるのはきまってかれ自身の方なのである。そのプロセスをわれわれ読者との共謀によって成り立たせるところに、中田の詩の持つ訴求力の秘密があるに違いない。「詩の中では、生成、それは調和させることだ。詩人は真実を語るのではない。かれはそれを生きる、そして真実を生きながら、かれは偽りになる」。狼は風を喰らって飢えをしのぐ。擬装と虚偽の生成のただなかに、われわれは暴力的なまでの真実の過剰を見るだろう、破碎された閃光の軌跡を見るだろう。

装丁——著者自装

もくじ

*

夜の雷光 9

夢であることの悲しみ 11

暗がりです手を洗う 13

まちがい 16

駅にムササビが 18

七月 21

たとえば夢が 25

友だち 27

ぼくらが幽霊になるまで 30

ムンクの星月夜 32

夏のよるべ 34

feelin' bad blues 36

天使たちの戯れ 39

Surely 42

点景 45

夜の中心地 48

憐れなるもの 52

He Said 54

見世物小屋の私生児たち 57

ぼくの電話 61

Canary Wharf in Heaven 63

光りにならない。 66

Rock 'n' Roll Suicide 69

蟻 72

音楽をください 75

抱擁 78

Alone Again Or 81

食卓をめぐるダンス 84

*

あとがき 97

解題 100

著者来歴 115

著者近影 116

*

不／適／当／詩／劇

夜の雷光

夜にさえも見放されて、

飛び起きておもう

かつて惹かれた女たちを

そしておれをきらった女たちを

氷上の稲妻みたいに去ってしまったなにかが、

おもての車のポーチを照らす

いつまでもおれをはなれないかの女らのこと、

眠れないからだが求める、皮膚の安寧

あるいは空腹の技法かなにか、

ともかく道のわからない時間があまりにも多すぎて、

じぶんの痛みさえ、遠い過古みたいにインターの出口をさ迷ってる

なにしろ、この時間には終わりというものがないから、

去ってゆく車の窓が怪しく光りだす

過古の高速がすべてをかつて見た夢と融和する

まるでその夢のなかで、夢であることを悟ってしまったみたいに

高橋恭司が撮ったブコウスキーのポートレイトを懐いだす

何年もまえから棚にある写真集が時折、おれの手の中にある

晩年のかれの顔の皺から、おれの手皺に至るまで、

発光する歳月がおれたちを通り過ぎたものだが、

かれは栄光を勝ち取って、

おれは負けつづけ、

やがて稲妻に打たれる

男というものは母親から女たちへの接し方を憶えるときさっき読んだ

それならばおれは失寵と疎外と黙殺を学んだ

新神戸駅が驟雨のなかに建ってる

この詩を書くために駅まで歩き、

そして帰ってきたおれには、

おれのような男にふさわしい死をおもうことの、

ほのかな愉しさだけが千年の雷みたい

窓を照らしつづける、

—— 黙れ。

夢であることの悲しみ

おそらく、

夢であることの悲しみは

だれもない室で展ひらいた本みたいなもの

町の中心で戦争が始まったから、

エールとビールを開けて祝福する

ひとを憎悪にかりたてるすべてが好きだ

でも、これだって夢、じぶんが眼醒めてるといふ夢

囲いと鉤を身につけた牛が人間を焼く

災厄が心地よいところまで、

おれを追いかける

心理だ

茶毘だと繰り返す異端審問の男たちとともに

タバスコの効いたレッド・バードを呑み交わす

ところでこれが夢だとは

おれにはもはやわからない

放熱器を破壊された車がひとり、なまえを失った

回転するナイフが炎みたいに燃え、

われわれがもはや個人でないという喜びのなかで、

いままさに料金所を増殖させる

意味は敵だ、

人生は接続詞だ、

そして折り重なった死体にはだれであれ、心を動かされる、

そしてだれとも問わずにその夢に悲しむ。

暗がりです手を洗う

暗がりですをして、

暗がりです手を洗う

洗面台にも、

浴槽にも、

魂しいのおきどころが見当たらない

たしかなものはタオルだけで

そのタオルもひどく汚れてるのはいったい、

なぜかなのかを思索してる

かつて保護房の拘束のさなか、

看護人どもの見守るまえで

くそをさせられた辱めを懐いだす

あのときの怒り、そして諦め

すべての人生でもっともむきだしにされた悪意と便意

見いだされたもののなかでもっとも無様なおれ

恍惚のない不安とともにいまでも、

いまでも取り残されるおれが

あの室で静かに叫んでる

人間性よ、

おまえはおれを見殺しにした

可読性よ、

おまえはおれを縛りつける

どうやつても人生が理不尽さにあらがえないときこそ、

アルコールが必要なんだって、

おれはおれにいい聞かせて来た

だって社会はもはや閉鎖病棟そのもので

だれもが病衣を着て歩いてる

だれが医者で、だれが患者かの区別はもはやない

おれは水を流した

便秘のブルースを歌う、ジェイ・ホーキンスみたいにいつか、

黒魔術を使って、あの医者や看護人どもを殺したい

そして血に滲む愉楽のなかで、

ちよいと千年ばかりの夢を泳ぎたいんだ
こいつは赦されるだろうか？
——もちろん。

まちがい

過古を走り去った自動車が、やがて現在へと至る道

それを眺めながら、ぼくは冬を待つ

ぼくはかつて寂しかったようにいまも寂しい

こんなにもあふれそうなおもいのなかで、

きみのいない街を始終徘徊してるのさ

これまでの災禍、そして怒り

なにもかもが一切、見えなくなるまでずっと

たとえば火の論証がぼくの存在を照らしてくれるのなら文句はない

たとえば水の弁証がぼくの善悪を論じ尽くしてくれるのなら満足だよ

でも実際、なにがぼくの存在を照らすというのか？

なにがぼくの善悪を論じてくれるというのか？

もしかしたら、とんでもないまちがいを犯したのかも知れない

小さな売店でホットドッグを買い喰いしたとき、

落とした小銭入れが女の子の足に当たって、
地面をバウンドしたら、かの女は驚いて、

コーヒーを零してしまった

ぼくは謝りながらも、

かの女の靴の、エナメル質のことばかり考えていた。

駅にムササビが

駅にムササビがいて、とても迷惑なんです

かの女はおれにいった

どの駅に？

どの駅にもです

それでおれは、——といいかけてやめる

もはや、かの女の眼におれがないのを諒解して

ちょうど3年まえの秋にもおなじようなことがあった

おなじ子供が跡をつけて来るといふ男がいたっけ

おれはかれを匿いながら都市と倦怠のあいだを歩き、

やがて3番出口でかれを見棄てた

いったい、だれがこんな筋書きを描くのか

繰り返される運動、そして跳躍するスタントン

スタントン、あるいは脆弱なラーゲ

それらがおれになにを与えたか

ひとは神を創造して苦しみから逃げた

では神々が逃げるにはいったいなにが必要なのか

天使は淫売だった、牧師は小児性愛者だった、

教会は金満家で、お告げは集金マシンだった、

黒いイエス、黒いノア、そして黒い池田大作そのほか5名

おれはおれのなかの河に碇を降ろす

駅にムササビがいて、とても迷惑なんです

かの女はおれにいった

たしかに迷惑かも知れないけれど、

おれにはどうだっていい

かの女を駅員に引き渡して、

おれは逃げていた

どの出口にもかの女が立っていた

逃げ場のない焦りのなかでおれは急ぐ

なにしろ、この詩形には終わりが無いから

むかし、小学校でいわれたように

おれの人生はすでに終わっているのかも知れない

そうおもって公衆電話に駆け込むと、

救急相談窓口にかけて、

永遠ともおもわれるあいだ、

おれはずっとずっと、

ムササビがいて、とても迷惑なんですと告白する。

七月

現在を過古のように話す男たちが

路上で種子を蒔いている

真昼の儀式めいた

時間を

過ぎ去っていく詩業

うずくのは唇

うめくのは棺

あらゆる鍵穴と符合する夏の神経痛

七月よ、おれは産まれた

おまえの腕に抱かれたおれがいま、

為すべき判断を下すとき

たった一台の三輪車が主語にまでなったかのような快感を憶えている
いつだったか、なくした人形を探しに公園を訪れたとき

終わりのない焦りのなかでささやかな悪意に眼醒めてしまった

おれはじぶんがなにかわからないものに憑かれ、

そして迷ったんだ

たったいま時の明滅するバーガーキングで

かじりついたアボガド・ワツパーが

店内で爆発炎上する、

苦い場面

いつだったか、おれはいった——おれを殺さないでくれと

夏の太陽とアラブ人とを妄想する入植者のように立って、

おれは砂でできた拳銃をいくどもふりまわした

それはずっとずっと未来のことで、

もう憶えていない

陽炎のなかから現れたのはまちがいなくきみで、

死に憑かれたこの男を嗤っている

けつきよく最後のときまで

果たせなかった願いを

いまだに復唱する——きみと話がしたいだと

まちがいを正し、魂しいを律する方法が欲しいだと

いまや、すべてが潰えてしまったけれど、

おれはまだきみにまつわるすべてを処理する術がわからないでいて、

過古を現在のように語りながらカフェイン錠を嚥み下す

愚かで幼い賭けごとのように人生を浪費して来た

交差点でようやく見つけた幸運も、

職務質問で取り上げられてしまっていた

いまはもうだれも、だれも此処に残っていない

あるのは悲鳴だけ——だれもいない室に残された悲鳴だけだ

七月よ、おれは産まれた

おまえの腕に抱かれたおれがいま、

為すべきはたったひとつの質問

答えのない永遠のなかで光りつづける忍耐

坂をくだるバス、あがっていくダンプ・カーよ

やがて夜になるだろう世界に寄り添って、

ダンスをつづける使者たちを見よ

警笛が色を生す歩道で、

たったひとり羽を生やした子供が、

おれのゆくべき道を照らして、

カンテラを手にいま対向車線を横切る

七月よ、

おれにはそれが見える、

いまでも。

たとえば夢が

たとえば夢が足にからみつく整形外科の窓まで

跳びあがるくらいの勢いでおれは此処にやって来た

緑色の玻璃が砕け散った場所までやって来た

すべてがそれらしいだけのつくりもの

すべてがうわべだけの世界から

あなたの心臓を突き抜け

やはりだれもおれを理解しないという点で

なし崩しの和解を交わした

真昼の月が眩しすぎるからというだけの理由で扼殺された男

かれの亡霊とともにひとびとが駅を急ぐなか

たったひとつきりのあこがれを喪った

いまだにその疵が癒えないのはぜんぶあなたのせいだ

だからおれは水鉄砲で武装して病院の物干しを跳躍するんだ

いつだったか、あなたがおれを指して嗤ったことやなんか、
古い屈辱のなかでなにもかもとおまんこする
それが空想でないとだれがいえるだろうか
それが感傷でしかないんだれがいえるだろうか
おれはおれのなかに侵入する
おれのなかのいつぱいの他人を犯すために
ちがった顔がまたこちらをふり返る
それがあなたではないというだけで射殺した
あれもこれもすべてはあなたのため
おれはあなたのなかの奴隷のひとりでしかない
ただおれの季節がプラモデルとして販売される夜ならば、
こんなに入り交じった感情を剥きだしにすることはないので
いまは夢のなかに存って気分が少しおかしいんだ
いずれにせよ、主題はすべてあなた自身で、
おれはあなたに操られるがままの人形に過ぎないということが
鑑識からあげられたんだよ。

友だち

洗いざらしの衣類のなかで、リーバイ・パタの詩画集をひらく

女のいない男がしてやれるのはたったそれだけのこと

コインランドリーが不法占拠されてしまう夢を

ついさっきまで見ていたんだよ

もしきみが電話をかけてくるならば、

ほんの少し孤独を信じられる

ほんの少し痴性を信じられる

おれに与えられたものに唾を嘔いて

おれに与えられなかったものに焦がれて

ついさっき犬の便器に花をちらした

やがてその花が城にまで成長するあいだに

どれだけの戦があり、歴史が書き換えられるかをきみと一緒に眺めたい

もしもおれがまだきみの友人で、きみにとってなにかであるのなら

午後の時計がベルを鳴らす

きみの知らない場所で、きみが知らないひとと会う

ばかげた冗談をいくつもいって、死そのものを笑いものにしてやった

きみのいう自殺について発言なんて死の実証よりもたやすいものだ

きみがすべきはきみの窓から友人を呼び集めること

きみがきみであるという論証を獲ることがさきだね

おれはじぶんの死について大した考えはもってないけど

いえるのは迷惑、——そして生きるよりもっと不可能な満足さだ

洗いざらしのウエスタン・シャツを着て、リーバイ・パタの詩画集をひらく

かれの語る声が聞えるよ。

月のおかげで

僕の中の壊れた破片が見えて

つなぎ合わせるよりも

そっとしておいていいよと。

ここは僕が洗われる

裸の世界。

ともだちに囲まれた

孤独の場所。(リーバイ・パタ『ともだち』より)

ぼくらが幽霊になるまで

捧げられたものと与えるものの区別がつかないままで、

ぼくは語って、きみは答えた、のはぜんぶがぜんぶ正解じゃないから

なにものともつかない悪夢を乗せて亡霊がインターステイツを走る

あかときのまぼろしみたいなかたちでもって説明書を読むとき、

セメダインがぼくの足下で泥酔していることに気づかざるを得ないのはきつと、

きつときみのせなかにある自爆ボタンに魅せられたからだだった

だのにきみはぼくを裏切ったばかりか、

形式を破壊した

『殺しを呼ぶ卵』——そんな映画が上映された町で、

ホドロスキのまねをする演出家たち

だからぼくは虐殺したんだ、夢のなかの親や姉を

答えないからだを求めてしごく茎はまだ熱いからね

きみがもつとも嫌悪する手法で演じられるハメット、

ホロメス、チャンドラーたち

『愛について語るときに我々の語ること』だって？

どうも見憶えがないバードマンの思考のなかで、

ひらめいた花が評論家を撲殺するからといって、

甘えることはできない

応えることはできない

なぜ、

なぜなら、

われわれはまだじぶんの声を発見してないからと

じぶんの声のない詩人たちが吠えてる

だってふさごとよりも愉しい快樂が、

自己確認がどこにもないからだ

きつときみの心臓なら、

10時間は持つ

たったいま現れた、

装填済みの拳銃のように

いつせいにみんなからたちの葉を射抜け、

ぼくらが幽霊になってしまえにさ。

ムシクの星月夜

さみしさがどうにもならないとき、口のなかで爆発する薄荷飴を算えて、

ひとつの動作から、もうひとつの動作へと移ろう、おれは孤立者

いままであったことのぜんぶ、経験のぜんぶを蔑^{なみ}するだけで、

たった1日から1週間までが消滅する、おれは孤立者

いままであった裏切り、じふんでじふんを

追放してしまったことを悔やみつづけるだけのときがつづく

そして恐怖とともにのみ、なにかを信じようとして、

それが見つからないことに苛立つゆうぐれ

ぜんぶが無意味なのかも知れない

過古をつれあいにして、

場面から場面を拡大しつづけるおれ

深夜の摩耶埠頭から、この新神戸まで、

走りつづける大型トラックにはどうやら、

おれの妄念を消し飛ばしてくれるような叙情詩を書くための、

鉛筆すらもないということが、ちかごろの農家学と、

占星術師との交わりのなかで、

判明したらしく、

ダリのポルノよりもムンクの星月夜が好きなおれは秋霖のない銀河で、

ジャニスの“Move Over”を踊りながら、かの女とかの女の男友だちについて、

どうしても考えてしまう悪癖を片づけようと、

抽斗をあけて電針銃ディザィの銃把を磨く。

夏よるべ

かつて昭和記念公園（旧米軍立川基地）でわたしは森忠明と歩いていた

あじけない夏の夜でしかなかった

わたしは先生と話しながら

東京都市の暑さのなかで

これからの人生についてみじかい詩句をひねりだそうとしていた

先生はいった、――「帰らぬといえぬわが身の母捨記」って季語はないけど秋だよな

わたしのつたない俳句、そして情況の見えない夜のなかで

わたしはわたしであることの非情さにやられていた

公園を歩き終えると終夜営業のファミレスで、

わたしたちは話をつづけた

――いい本、読んでるじゃないか。

――おれもむかし読んだよ。

わたしはウィルソンの『アウトサイダー』と、

ヘッセの『荒野のおおかみ』を持っていた

そしてかれから金を借りた、——秋には必ず働いて返すといい、

ながい放浪のはじめにあったこの出来事に

先生は『秋とちぎれる人』という随筆を書いたんだよ

すぐにあれから、わたしのほうは東京から逃げだしてしまったけれどね。

feelin' bad blues

田園のなかでギターを鳴らしつづけていた男がふいにうごきをとめ、

河べに立ち、永遠ともおもえる時のなかで鳥を眺めている

かれが悲しみの澱みたいにおれには見える

それはこの十年ものあいだ眠っていたおれのなかの慈愛みたいなものなのか

ともかくおれは早めに切りあげて河をあがった

石を探すにはこの河べはよろしくない

だれかが水切りをする音、

そして最後の暗殺

どれをとつてもなにを見ても変わらないおれのなかの澱

その澱を沈めてくれるひとをおれは求めつづける

この静寂、そして感傷

惨めつたらしいこのおれを救抜するひとを

おれはいまも求めている

杭がいつぽん河床へかけを落とすなか、

疾走する光りと、

失踪した人間とが語り合う

ほんとうに大切な時間

やがてなにも見えなくなるまでにどれだけのおもいをたずさえていけるか

そつと帽子を脱いだ老人がおれの道標にでもなったかのようで、

おれはなんとなく微苦笑して、そのままかれのあとを追う

なんとあたらしい燻蒸、なんとあざやかな苦み

それでもいつしかかれとははぐれ、

なにもない三叉路にたどり着く

木は枯れ、水もなく、

たったひとつの空にさえ鳥もない

どうしたものか、

おれはつまづいて、

そのまま身うごきがとれず、

なにかを掴もうと手を伸ばす、

そのときだった、おれはおれの手を握って、

やがておれとともに澱のさらに奥へ、

心の内奥へ、北のなかの北へ、
足もともふたしかなまま歩きだして、
黒い犬と混ざりあい、
四つ足で国道を駈け抜けて、
森のなかへと入っていったんだよ、
さらにちがう澱へとね。

天使たちの戯れ

どうしたものか、現実がむきだしされた食卓で、
顔の见えない相手と朝食を摂っている

現実はどうもおもすぎる

おれは虚構の度合いをもっと深めたい

だってそれがおれ自身の生き方だからだ

もっと深いところまでうそでありつづけたい

ふと手にとった短篇小説を窓のむこうに落とした

けっきょくおれにできるのは手放すか増やしつづけること

きのう拾った猫はもういない

この場が好かなかったみたいで

取り残された毛布はまだ温かいという事実

なにもかもためらいのなかでしか機能しない事実

人語を忘れてけものになりたい

過古を殺して生き直したい

あるいはそういった願いすらも抹殺するなにかを

おれは探してさ迷っているのか

ああ、作業所の時間だ

おれは詩を放擲する

そして立ちあがる

見えない顔はじつはきみの姿で、

カソリック教会へと祈りにゆくんだ

それをおれは止められない

でも祈りが、天使たちの戯れでしかないという現実を

おれは心のなかに書き留めて上着を着る

じゃあ、おれはいくよ

いつも通りの医者に通って、

それから1時間の作業だ

仔牛とともに眠る幻想のなかで

おれはなにもかもを見抜いてしまう

それは長い永訣のなかで砂糖菓子をわって、

片方を渡すようなさみしさだ

おれが求めたきみがいない道の半ばで、

とても鋭いなかがぼくの鼻をかすめたとき、

決まった動作を厭うあまり、おれは路上に伏せる

そして集まって来たひとたちにむかって、

肩にかけられた手と手にむかって、

「おれに触るな！」と叫び、あたらしい眠りのなかで、

きみの幸運をただ祈ってみたかったんだよ。

Surely

だれのものでもない両手で

だれかを傷つける

呼び鈴がおれの耳に

爆発している

やり過ごすことのできない咎に身をふるわせて

やはりだれも

おれを諒解しないというところで

合点する

他人の顔に鉋を下ろして、

それでもだれに気づかれないままで終わる

きょうのことはぜんぶ忘れる、だれかがいったように忘れる

それでも、おれはおれを赦さないでいるんだ

ラジオがいう、——あの世は天国だって、

おれはおもうんだ、

それを地獄の住人たちに伝えてやれよって

雨のなかで待たされている多くのひとたちに伝えてやれよって

それが好みの事実ならねってさ

でもおれもまた通り過ぎるんだ、退場役のエキストラのひとりだってことに気づく
そして多くの物語が中断された路地をあたりまえのように去ってしまうんだ

だれのものでもない両足でおれを傷つける

自分自身を獲られない躰でもって、

あしたが祝祭であるかのようにふるまいつづける

人形の家に灯りが点りはじめた

むかいの養老院で人生を終える老人たちの幸福さに焦らされ、

じぶんの顔を忘れてしまった一瞬を

スクリーンに投影しつづける

きのうことはぜんぶ憶えている

きみに話したように憶えている

それでもきみはきみを守り通しているんだ

かの女がいう、——光りが嵐を超えてやって来るって

おれはおもうんだ、それを春を待てないひとびとに教えてやれって

闇のなかで待ちくたびれているひとびとに教えてやれよってね

それが好みの真実ならねってさ

きっとだれもが足掻いて来た、過去と現実の磁場のなかで

自身の行いすら忘れたやつらに罪をつてな

きっとだれもが足掻いて来た、過去と現実の磁場のなかで

自身の言葉すら忘れたやつらに罰をつてな

それが当然のことなんだ、きっと

やつらが存在している事実の胸糞で、おれはいつも嘔きそうになって、

トラックがスタックして停まる道のむこう側で絶えず見張っている警官たちの家庭を

不道德に充ちた笑みでもって、やさしく葬ってしまいたくなるんだってつぶやくのさ

やつらの存在している事実がまるでうそっぱちだったってことにしたいくらいにね、きっと。

点景

電話は大人しい

躰がいきとどいている

なにせ調教師がいるから

どんな粗相もしないでいる

だれかが季節の花を奪ってゆく

ここには警官がいない

ここには給油所がない

憶えたての歌は鵜よりも早い

なしろ新車ですから

音がちがいますよ

気に入ったのは

値段だ

だれかがおれを呼ぶ

呼ばれるということに期待する
でも実はだれもない
ここから遠く去ったあなたがたへ
おれはいま機動隊を仕向ける

きれいに刈り取られたセイタカアワダチソウ
立地条件のいい土地はもうない
だれもない街で

人身事故が起きる

そつと手をふるように

どつと血があふれる

きみを知らないせいか、

やけに貌がまぶしい

陽に焼けたジャケットが

クリンチとサミングで

砕け散って

まさかおれかとおもって、
ふりかえるとそこはやはり無人で

婦人警官のかけだけが
高熱放射を受けて
輝いていた。

夜の中心地

*

ふるい納屋にしつらえられた祈禱台からひとりの女がジャンプする

1920年代の、イギリス製で、オーク材

スパークしたあらゆる過古が、

ひめられたものを悉く暴露する

だれかが扉を叩く

だれかがそれに答える

長い祝日のなかで冬の花だけが

夏の予感のなかでみずみずしい声を放つ。

*

星の在処をおれは探していた

暗い御堂のなかを進み、

3 番めの室に入る

そのとき、すれちがった男が木曜日だと識ったからか、

おれの全身をまさぐる季節と、

おれのあたらしい靴で、

おおきな手をふって、あたらしい顔を手に入れる。

*

すべてがそれらしいふるまいで去ってゆく

おれの知らない隣人からその隣人へと手渡す花や

過古から現在に至る来歴を失ったかげが

語り合う公園を眺めて、

おれはおれでないものを望む

でも、そいつはボーイングのなかで

気を失ってる。

*

愛を閉めだして虹に火をつける

判事のいない室できみが現れるまで

鮭の皮を剥ぐ一連の動作とともに

おれは欲に喘ぐあまり、

きみの写真を焼いてしまった

もはや輪郭のないおもいでの中かで

きみの映画論を騙る3人の農夫と一緒に

晩餐会へむかおうと蛙をたぐっているのさ。

*

町外れのモーターで、きのう眼を醒ました

近代を知らない、ムスリムのような顔で、

猫が飛ぶ空は、

なんとも修辞学的だった

おれは手紙を書いた

そして棄てた

あらゆるひとが

あらゆるおもいが

消え去るまでちつとして

都市の中心地できみを待っている。

*

憐れなるもの

あるいは「おれはイアン・カーティスのものまねに過ぎない」。

深夜、たったひとりでイアン・カーティスのものまねを踊っていたら、

朝になって苦情の電話が管理会社からかかりやがった

バリトンで吼えながら、「残虐博覧会」はまずかったんだ

せめて「死せる魂」にするべきだった

イアンを身ぶり、手ぶりするのは危ないことだ

もっと突っ込んでいつてしまえばキ印だった

おれはきれいに、きれいに死にたい

淫欲時代を懐かしみながら、

最後の盃を慈しむ

そんな光景をおもいながら、それでも死ねないでいる

スコットランド・ヤードに追跡されるという妄執とともに

21世紀を闊歩しているのは正気の沙汰じゃないぜ

三幕一体の作劇に尿^{いばり}を放ち、

サム・シェパードの戯曲を読む

黄金の緑が解けだした画面で、

さつきはひとりの女が投身自殺したけれど、

おれは生憎高所恐怖症だから、

薬を嚙むだろうな

そしてガスをひねる

女は伝説の譬喩ならば、

男は寓話の譬喩だろうか

疑問符と感嘆符をとりちがえ、

人生を再建できないペソアの同胞たちと、

ヴィクトリア幻想を学ぶしかないんだ

首を吊ったイアンと憐れさのなかでまだ生きているおれとの

回路が見当たらない駅の券売機で、

地獄への切符を握りながら、

ルンペンの男をいま観察している

きみはそれを懐い描いて、

そっと笑ってくれよ

そっと笑うんだ。

He Said

存らしめよ、かれはいった

ばかな、そんなばかな、

たわごとはたくさんだっておれは応えた

芝生のうえを通過する鈍行列車や、

ハイカーたちのあいだを縫って、

交通網はさびしい

だれがだれを裁くのか

おれが鯖を捌くのか

ひらかれた天戸のなかで

ふるえてる女神をいままさに

犯そうとする、いっぴきの副詞

助動詞と共同正犯をやらかした修飾詞が、

おもい灰語のなかで澱む

いまさらかの女をおもってもなにも帰って来ないという軀のなかで、
おれが乾涸らびるのをどうか、見届けていて、

存らしめよ、そうかれはいつた

氷上を滑るキャデラックのように

流線形の未来を甘受するのに溺れ果て、

やがて消えていく対象におもいを馳せる

そのとき、天井裏の住人たちを突き破って、

おれのなかの女が、妹たちがバタフライする

たとえば昼餉の鰯とか、冷めた鮭たちとともにして、

熾き火のないほうへとかすかに動くさまはなんとも賢しい

けれど、密告の快樂を知った保護者たちがおれを標的として、

領地の御所を賜りながら、ひとりひとりとなまえを絶滅する、

運動をしかけようと佇んでる

固有名詞に厭いたひとびとが眠る墓地の一角で、

接続詞のあまい誘惑が迫るなか、

いまさらかの女をおもってもなにも帰って来ないという軀のなかで、

おれが乾涸らびるのをどうか、見届けていて、

見届けていて、

見世物小屋の私生児たち

産まれてからずっと、

わたしは逃げつづけてきた

幾度もいくども素足で階段を上った

あたりまえのことができず、

踊れない腰つきで、

ステップを踏む

いくつもの咎を塩素で洗い流し、

見世物小屋の私生児たちを見限った

そのつもりできようまで過ごしてしまった

だけどわたしの属性はあくまで銀河であって路上ではない

ビタミンの欠乏した軀でまぎれもない電波を受信する

麦の芽を解す春の雨のようにレインコートが降りしきる町で、

たったいまインタビュアの突きつけた質問を

地獄まで蹴りあげる

わたしになにもいうな

わたしになにも訊くな

わたしはなにも知らない

わたしにはなにもできない

かつて産まれたところへ、いままさに帰ってゆく

わたしはずっとずっと逃げてしまった

素足を水に浸してわずかながらに安堵した

特別なこともできないで、

呼ばれるたびに

奇妙な姿を曝したんだ

いくつもの裁きを膚に擦り込む

わたしもけっきょく見世物小屋の私生児だった

それがわかって、やがて受け入れた

けれどわたしの約束は葡萄であって林檎ではない

亜鉛の欠乏した頭でささやかなる季節を感受できる

卵の花が疼くみどりのなかにけものを放つふりをして、

ついさつきガス・コンロに生け花を活けた
そいつを天国まで輸送しようと驗みる

あなたになにもいわない

あなたになにも訊かない

あなたはなにも知らない

あなたはなにもできない

わたしはもう帰らねばならない

わたしも見世物小屋のひとりとして、

いままさに産まれた場所に帰ってゆくんだ

おやすみ、みなにおやすみ

眠りのなかにある、最果ての土地で、

ひるがえった犬とともに黄色いヤツケを着、

走りだす道を、まちがった道を一心に駈けて行って、

あるべきところへとわたしは去ってゆく

同種のものたちへと回帰する

どうか、見守ってくれ

使い古されたペガサスよ、

その心臓よ

用意されたプールで珍芸をするさまを
とくにご覧あれ。

ぼくの電話

ずっとのあいだ、

ぼくの電話は沈黙している

当然だけれども声がかからない

だれかがぼくを知っているはずなのに

親しいひとすらもぼくにはない

羽のような塊りが浮遊する午後の窓

電球を算える子供の声がどこからかしている

それでもぼくの電話は黙っている

ぼくはきみの好きなものがすきだとおもう

でも、きみはぼくの好みを憎みつづける

階段のない裏庭で、過古にたどり着くという遊び

その真ん中に遊動円木をしつらえる

ぼくが此処まで来て

だれもないとしてでも

ぼくにも方法と愛が必要だとおもう

迫り来る壁のなかを着飾った声で

だれかが受話器を投げる

池の鯉のように口をあけた姿をしてなおもぼくの罪を算える

やめろ、やめてくれとぼくは叫ぶ

まだ秋色をした萩の花が

ぼくを待っていているところまで、

ぼくは逃げだしたいんだよ

階段のない裏庭で、過古にたどり着くという遊び

その真ん中にきみたちで遊動円木をしつらえる。

Canary Wharf in Heaven

悪夢を謳う儀式をやめられないでいるトラック・メイカーとともに

ぼくはモーリン・タツカーのドラミングを聴いている

どうしたものか、かの女が左利きであるような気がする

さつき尋問のようにつづく高速道路を抜けようとして、

誕生日を失った子供らとともにサービシアを抜けたのは午後の真実

ささやかなやさしさでぼくにことづけをする幽霊たちと、

おなじような顔をして、きみが窓に立つ

その一瞬、その挙動

見逃したはずの科白でぼくを責める毗、

いつかは——とぼくがいう

きみを愛せるかも知れないと

小学校で見つけたきみの滑稽なさま

きみがぼくを嫌悪する百の理由のなかで

見失ったはずのけものたちが

とにかく臭いんだ

かれはいま——ときみがいう

すべての望みを叶えたと問う

そんなもの死後のまぼろし、たったいまのうそだとぼくはいう

きみの開かれた家には犬さえもない

透き間から入る泥棒さえもない

すべてがきみの迷妄だったとしても、

そいつがいたい、なんの障りになるのだろうか

ぼくは13時の離陸に合わせて、

腕時計を組み立てている

ありもしないもの

いもしなかったはずものを追い、

たったひとりこの土地までやって来た

母のようなものを拒み、

父のようなものに耐えた、

たったそれだけのことで人生は消費され尽くされて、

半額シールのようなむなしい烙印を押され、

天国のカナリーワープでいま、
冷めたアールグレイで、
スコーンを喰う、
それが結末。

光りにならない。

夢の時間も砂嵐のなかに消えてしまうだろう

そんなテレビジョンの懐いでのなかで

光りになれなかったひとたちと

一緒の場所でも出遭ったのは

真昼の淡い幻想だった

いまだほんものの喜びが見えない劇場の舞台で、

おれはなんだか酔っ払ったように手紙を書いていた

始まりも終わりもわからないクラインの壺のような手紙を

きみに宛てて書いていたはずだったんだよ

索漠とした心に夏の光りが眩しい

おれたちは光り、そのものになりたいと願う

この祈り、そしてひらかれたままの瞳

アリゾナの沙漠地帯で取り残されたテレビがひとり放送を始める時間から

ゆつくりと立ちあがってしまったリヤマを撃ち殺すという作劇

鉛筆いっぽんでおれたちは旅にでられたし、オープンワールドの地図さえ書けた

ゆれる襟を放さないで

ゆれる襟を放さないで

おれたち糞のように垂れて次の角をまがってはまた消滅する

きみのいない場所やきみの知らない言語で語り合う

符号する穴をすべて塞いでくれ

符号する穴をすべて塞いでくれ

電波塔に変身する巨人たちが馳せ登る丘で、

いったい幾つものラジオを埋めたのかを懐いだす

時計の針を幾つも失い、そしてたどり着いた夜を憾むとき、

捕まえたレインコートが猫でなかったという根拠で殺害される頃、

きみの手配書を壁中に貼って、インカ帝国の歴史を傍証するおれはたぶん、

たぶん今更きみに出遭うこともない、もはや出遭うことはない

過ぎ去った他者をもはやおもうことなどない

過ぎ去った未来をもはやなじることもない

なぜならおれが生きた証はこの本でしかないからだ

なぜならきみがおれのなかにいたのは束の間の宇宙だってわかったからだ

ブラウン管から8Kウルトラへの進歩と逸脱、

体感幻覚に襲われたひとびとがさ迷う町のなかで、

もはやテレビなんか要らない、なんの助けにもならないと気づく

おれもやっぱり光りになんかなれやしないんだよ

心のなかにあったきみという現象を掻き消して沙漠のなかを歩く

掘り所など知らない、——ただおれたちが生きていたっていう記述が欲しいんだってことに

おもいもよらず、ぶち当たってしまったんだ

ああ、こんなところで、

そう、こんなところで、

醜さまでも素粒子へと変換させる、そんな力を望むまま、

この沙漠のなかで黒いマリアの帰還を待ちわびる、

そんな永遠の正午さ、

その道すがら、

おれは最後に云った、「きみがもし現れたら、

キヤデラックと結合したおれの陽物で、

きみの大切なものをぶっ壊してやる」ってな。

Rock 'n' Roll Suicide

だれかがいったようにロックンロールにも自殺にも似合わない時代だ

失うには速すぎた、撰ぶには遅すぎる、そんな時間が過ぎる

莚をやめるように生きるのをやめられない

どうしたものか、そんな時代を生きて、

わたしはすっかり怖じ気づいた

愛がなんであるかをわたしは知らない

きみも愛をなんであるかは知らない

きみがずっと知ったふうな口をつづけるのが不愉快だ

なぜって？——そうわたしはいつも疎外者だったし、

アンプ・スピーカーの具合はずっとわるいままだったし、

きみのいう希望にはずっと脅かされて来たからだ

北半球の歴史——焼け落ちる莚の速度がわたしに迫って来る

詩文を造形しながら描くことの憂さにさんざん厭いて来たからか、

きみのことがいまでもきらいになれないでいる——それはなぜか？

訪れた闇が夜でなかったからとテクニカラーで塗りつぶされたときはこうもおもった

どうか、わたしを傷つけないで

どうか、わたしをはなさないで

どうか、わたしを傷つけないでと

くりかえすほどでもない辞にやられて、

わたしはいささか熱に魘され、

でも、そのなかで見た夢が事実だったようにふるまって、

きみの腕のなかで、

なくしたものを集めて、

手の届かない将来とともに

わたしはぜんぶ限界だと告げる

じぶんの散在する小さな室で、

まちがい探しをするような快樂が残る

でも、わたしを傷つけないで

でも、わたしをはなさないで

でも、わたしを傷つけないでと

際だったなにかが水鳥の姿をして群れを生ず

水禽の夢も黄金色へと変化するだろう

聞えなかったきみの歌声、走りだした運河なんかが、

わたしの想像を超えて疾走するなかで、

憶えたてのあの娘の上履きの味やなんかが、

失われた地平で「おれは死ぬべきなんじゃないか」とくり返す

わたしにはとてもできない、とてもできないことづけた

こんな混迷のなかできみがひとりじやないなんていえるわけではない、

こんな混迷のなかできみがひとりじやないなんていえるわけではないって、

冷め切ったコーヒーを飲み下して、いますぐひとりでてゆく

いますぐひとりでてゆくしかないんだよ、

どんなにつらくとも、そうとも。

蟻

乾涸らびた道に南半球をめざす蟻たちの行進がつづく

いずれの運命、あるいは私的な詩を全うするべく立ち上がった足
われわれがわれわれでないと気づかされる、ささいな情景たち

一人称を見失いかけたおれを慰めるかのような象形たち

いったいどれほどの代償を以て、この道を歩むのか

おれにはいまだ払う術が見当たらない

謀略に充ちたデヴィッド・バーンの眼差し

dance と flick に溢れたショービズの世界

憧れはさもなく、望みは卑しいとおもわれる祝祭

やがて零れだした果肉を受け止める皿がないという理由で

配給米を拒絶された女たちの初夏はつなつよ

ああ、きつとこんな妄想もたやすく記述されてしまうんだ

おれがおれのなかではち切れそうなこんな夜は。

グイム・ヴェンダースの『夢の視線』という、

評論集を片手、村木道彦の歌集『存在の夏』を解剖していた

いろくす

魚の眼を照らす光りのような歌篇を読んでいた

それでもざわめきがやまないおれの脳髓はずっとだれかを呼んでいた

体内でうずく駅という主語が、やがて旅という一語に変わるまでの時間を見守る

両手を汚したこともなく、おれを虚仮にしたやつらを赦せないでいる

妄想のなかでおれはなんどもやつらを傷つけて来たのに

ほんとうの意味で撲り合うことができないのはまったく残念だ

きみたちのような男たちに屈辱を

きみたちのような女たちに剥奪を

是非とも学ばせてあげたかったんだ

けれどもおれはおもう

おれの人生で

どうして大切な時間を

おれが生きようが死のうが知ったことじゃないやつらに捧げるのかって

まるでそれじゃ、おれがいまだに従属的な存在で、

主体にはなり得ないといふらしているかのようなだから

きみたちには反吐がでる

おれは過去の哀傷をかなぐり棄て、

南半球を歩く

いままでの人生——くだらない雑役労働たちにくたばれと吼えて、
燃えさかる向日葵のなかで、たったひとつの種子を握り絞めるとき、
遺恨に充ちたおもいでなんか忘れてもはや、

たったひとり、蟻のように

立ち去ってしまうんだよ。

音楽をください

ロビー・クリーガーのように、あるいはユタカ・ヒラサカのようにギターが弾きたい

ときには折坂悠太のように吼えたい、三上寛のように私小説わたくしでありたい

ことごとく滅びたはずのぼくを呼ぶ音楽たちをいまも愛おしくおもう

堀内幹のよう懐いだされても、宮本浩次のように忘れられてもかまわない

ぼくがぼくの文体を得るのはいつも他者の声からだった

ヘロー、ヘロー、涙が抒情であつたときに帰りたい

ぼくのなかでじれるアーサー・リーや、トム・ウェイツがいまでもなごる

この海岸、そして浸透する大人たち

吉野寿、谷口健、そして吉村秀樹へと至る道をどう生きていいものかいふかった

松崎ナオよ、あなたの裏声はあのバックスペースには届いただろうか

狭い室からぼくはずっと眺めていた、ぼくのなかの音楽が正しいのかと

それでもかれらを溺愛し、そして没してしまうだけのなにかなのかな

否いな——否をつげる、ぼくはぼくの音楽をやるだけだ

神社の境内で手遊びをする幾千の子供と、

カネコアヤノの「グレイプフルーツ」を歌い、

フィリップ・セルウエイのストレンジ・ダンスを踊った

ここになにがあるものか、静寂でしかないんだ

さっきまで断線——そして詩的な死——そして驚嘆のセルジュ・ゲンスブール

狂ったおもかげがうつくしい賛歌を告げることにやっと、

おれは慣れて来たのかも知れない

いったこと、こわれたこと、いいもらしたことに澱みながら、

おれはたぶん、いまを生きている

おれの被造物として喋る幾冊の詩集とともにして、

これからもずっとあなた方を呪いたい

そのための呪学をここに、

どうかここに置いてください

それだけが祝祭、

それだけが祝祭なんだ

やがて散る発語のなかでわれた水瓢箪がぼくのなまえを名乗る、

そのときにきつと、そのときまでにずっと、

おれはわたしはぼくはずつと、

翻訳不能な言語のなかで、
生まれ始めた心のなかで、
それこそ否を伝えるために下座に坐って、
待っているしかできないんだから。
音楽、そして音楽を、
ぼくやあなたのなかに音楽を、
唄うでも聴くでもない、
ただそこにある音楽をどうぞ刻んでください。
さきほど水菜を落としてしまったんだ、
この器にも音楽をください
どうかください。

抱擁

夢のなかでだれかを抱きしめていた

夢から醒めて、じぶんがただのひとりきりだという事実に
むきだしの欲望が曝かれる、

作劇の手引き

光りを失った通りで

発見された手袋の血痕

染色体の区別もつかない謎の遺伝子たち

やがて来る真昼、その分光器たち

読み上げられたなまえがぼくでなかったという理由を教えろ

子供たちはいつも駈けまわる

そしてぼくの知らない時代にむかって消えてゆく

牛乳を飲み過ぎた朝のような輝き

電球を算え過ぎた男のような疼き

それらをとまって回転するテレビや、ラジオの声

そしていまも取り残された軀をだれかが持ち去ってくれるという幻想よ

やはりまた夢のなかで、かつて会ったことのあるだれかが、

ぼくをやさしく抱いてくれることを祈って宣誓書を焼き上げる

もはや、ことばのない境地——そんなものは見棄ててなにかもを記述する

ああ、こんなにもたやすくぼくは書き上げる、みずからの咎でさえも

延びすぎた庭の枝木が、未来へと到達するまえまでに

いくらかの小銭で、いくつかのパンを買う

夢魔のようにだれかはやって来ない

現実の外気から武装することもできず、

ぼくはぼくの軀を抱きしめる

夢のなかでさっき銃声がした

レプティリアンの踊るダンス教室の2階で、

ぼくはそれを聞いてしまったんだ

中空をあがる鑑定人たち、

野ざらしにされた駐車場で『優馬』を読む覆面たち、

算えられたなまえから形容詞を発見した税官吏たち、

それぞれにみんなさみしい自身を匿う方法も忘れて宙づりの人形を操っている
だれか、ぼくの声を聞いてくれ

長い沈黙を恐れて、こちらに立つ男が

競技用トラックスのいちばんまえで、

ぼくの耳にささやく

「地獄の夢がきみによって描かれる未来をおれたちは期待してるんだ」って
この過古に至る道、そして未来へと還る場所で、

幾人もの造形師たちが、死の原型をつくっては去っていったしまった

いったい、どれほどの妄想も詩を形成したりはしないことに

ぼくはすっかり興ざめしている

ぼくのいない場所を求めることのさみしさ

ぼくを抱きしめるだれかがいないことのさみしさ

自身の膚に爪をたて、ひっ搔くとき、

夢がもはや不在だということ、

そしてもはや現れることのないだれかのうしろをちっと見る

これは詩ではない、——傷痕なんだよ。

Alone Again Or

折れた、

夏草の茎の

尖端から

滴る汁、

突然静かになった水場

あのひとが愛の、

愛の在処をわかっていると誤解したままで

おれは死ぬのか

麦を主語に従えた季節は終わって、

世界の夏で、

いまは微睡む

そして無線の声だ

"The less we say about it the better"

でも、ちがうって気づく

おれはあまりにも

語りすぎたと

いままでずっとそう、

いまだってそう、

そのまま埋められない距離を

いやいやして応える、

子供みたい

雲が鳴きだしたあたりで、

ようやく針が動いた

運命でもないひとのためにおれは多くを喋り過ぎたって

それがまちがいだと気づくのが遅れて

この地平、その起源すらわからず、

死んでしまうのか

折れた、

茎の

尖端から

滴る汁、

静かになった水場よ

産まれた場所には2度と帰らない

舞踏病に罹ったハイカーたち

バスのアナウンス、

警笛の回数、

永遠、

無、

そんなものを抱えて、

去ってしまったら、

またひとりで。

食卓をめぐるダンス

*

警報がつづくテレビ画面のすみっこでぼくは歩き疲れた自身をなぐさめようとした

だれかが鉈を抱えてこちらに來ないものかと、ずっと不安に怯えながら

枝を踏む音がどこからかしているのにだれも気づかないふりで過ぐる

死んだはずの人間と、婚姻を果たす男は夜を信じない

冥府とこの世界を繋ぐ橋をマディソンと名づけながら、

太い血管のような存りようでぼくの眼を奪おうと、

隣人たちが裸を脱いで待機中である

どうしたものか、ぼくのなかでかれらが涸れた河みたいに人生を横切っている

だれともつかない呼び声がハロー、ハロー、と片言を囁くのはなぜか

その声にはくはレイモンド・カーヴァーの子供たちと名づける

だから、どうか、もうこちらには來ないでよ、

アルコールで痒い頭を掻き毟って、

酒場通りを突っ切ってくれ

中年時代を色取るはずだった、さまざまな技法を忘れて、
たったいまアンプの電源を入れたんだ

果てしない初恋の地獄、愛の地獄をもう受け入れまいとして、
ぼくはかの女を世界から削除して、

意味を失った言語から文字を差し引いたんだ

けつきよくきみが知るかぎりに於いてぼくは終わってしまった大人で、
この場所には夢も望みも、温かい繋がりもない

人生の速度はおもったほど、速い

長い眠りのようで短い覚醒に過ぎない

やがて寝台特急の幻影のなか、

なにもかもが消えてしまい、

ぼくはまたしても、

朝食を忘れる。

*

冬の夜のマントなかで男が通りを過ぎてしまうのは父の幻だろうか
もはや交歓のないおもいででの在処をぼくは殺戮して時間を潰した

道の端に坐って莚を吸う老人たちがガードレールを喰む

ラジオがぼくに語りかけ、バナナが人知れず腐れる

黄色いヤツケのランナーがひとり車間を縫って、

未明の海岸まで走るさまは、'90年代の映像だ

しかもその画質には**VHS**の香りがして、

多くの孤立者を酩酊させてしまう

ぼくは巨大な陽物となって新神戸駅へ突入したい

これまで生きた証、ここまでやってこれたことをたっぷり憎みたいからだ

ダイアとダイアが交差する、——谷上駅からカウントされた爆撃予告、

そしてポンヌフと名づけられた電話を携帯して歩くひとびとに幸福を与えたい

まちがっても自身の地図にない過古をふり返ったりしなくて済むように罰したい

公衆電話が鳴る丘で、ぼくは蜥蜴の気分で呼吸を整える

引用された意味と文脈がすれちがったところから、

ハム・エッグ・トーストをつくる方法がわかったから、

もはや田村隆一の『緑の思想』をたずさえて歩く必要はない

ペーコンを剥奪されたフランシスの頭上をずっと泳いでゆくんだ

だれともつかない呼び声がビコーズ、ビコーズ、と囁くのはなぜか

たぶん——ときみはいう、——ここが世界で最初の12月だからさって。

号令と大礼服が支給された町で、夜長姫が毎日殺されるぼくの世界じゃあ、もはや、きみとぼくでしか、この自由を確かなものにはできない

だって、——とぼくがいう、——ここが世界で最後の12月だからって。

真夜中、運ばれたラジオが役所で自裁したとヘッドラインの速報が告げる

ああ、この情景こそがぼくに与えられた幸福なんだ

おお、この迷信こそがぼくに決定づけられた罰なんだ

遠い中心街で、まっすぐにきみを見た、

ぼくがきみと出会うまでの回路を。

その地平が光りだす、あの恍惚のすべてを

ぼくらは見つめる、なにもかも信じようと

なにもかも受け止めようと。

*

ただいまアリゾナ州トゥーソンにてキャデラックの卵巣から電波を受信しました

だれかが鉈を抱えてこちらにこないものかと、ずっと不安に怯えながら

これまでの愚かな行い、アルコールに起因する問題行動の夥しさで、

ずっと、ずっとナースコールを鳴らしている

ぼくはいつも嘔きそうなんだ

遠くの友人たち、そのだれもがぼくを変におもうだろう

ぼくが狂ったっておもうにちがいない

でも、ぼくはこの暑い列車でずっとアメリカを待っている

次発の地下鉄へ乗って、17系統のバスを待つ

囚人たちのイカしたリズムでタンゴを踊る、警笛を持ったベースマンと一緒に

ぼくの出生日時と、ぼくの死亡日時を繋いでメビウスの輪にしたい

銀河と渾名された車で、トラックメイカーたちの麦畑を侵したい

タジヨウマルという猫をつれてテレビ画面を登りたい

知らない土地で知らない駅を探すように

きみはぼくの内奥でさまよう

大丈夫、ぼくが手を握っているから。

どんな迷妄もどんな虚構も、

敵じゃないさ

いつものように笑い澄まして、

郷愁に充ちた道を破壊する愉樂をつくりあげる

雨期のような姿で歩くきみを7月のようなぼくが追いかける

洞を叩くレゲエが、フランス国歌を唱うなか、

ぼくはきみと、君が代のリズムで、
ブルーズを奏でたい
いまこそ。

*

テレビ画面のすみっこでぼくは警笛を聴いていたのは午前2時も半ばだった
トラックがスタックして鉦が投げだされるまで不安に襲われていた

だれかが枝を踏む、その音にだれも気づかないまま過ぎる

死んだ人間の婚姻をきみは信じてない

マディソンが焼け落ちたあたりで、

ぼくの眼を奪おうときみが待つ

隣人はまだ待機中である

それもいい、——ぼくのなかでみんな水のないプールみたいに人生を諦めている
だれともつかない呼び声がアデュー、アデューと叫ぶのは儀式だ

その声にはぼくはカシアス・クレイの兄弟たちと名づける

やがてふりかぶった拳がクロス・カウンターを決めるとき、

はじめてぼくはきみの顔に気づく

きみはぼくだった

暗闇は夜だった

音楽は世界だった

7番めの月が落ちるとき、

ぼくときみとの青果物のなかの忘れられたアボガドが放たれ、

だれもない公園の真ん中で、名づけられない怪物とともに眠ったんだ

滲んだピンクがつづく裏階段でドロップを嘔きだして、

ペーヴメントに斃れた

だれかがぼくの躰をひきずってゆく

さようなら、ぼくの愛しかったひとたち

蒐集して来たレコードのジャケットたち

マゼンダからブルー・ヴェルヴェットへと至る場面で

死んだ鳩のようなぼくは長いお別れとともに

またもや夕食を忘れている。

*

なまえ (overwriting)

あたらしい夢のなかで眼醒めることができたなら

もうきみのことを懐いださなくともいられるかも知れない

でも、ひとのない13番地に立つたびにきみを懐いだす

いままで読んで来た悪党たちのなまえを算えるたび、

じふんのなまえがわからなくなる

どうしたものかきみとは

まともに話すこともできなかった

それまでの経験がまるでうそでしかなかったかのよういきみに牙を剥き、

そしてそれまであったほんのわずかな望みさえ手放してしまっただから

もはやもどり道のないところできみのなまえに疼きつづける、

きみのことばに疼きつづける、

きみがきみだけがほんとうの疵痕

あとはほんの失敗、ささやかな失態

なにも失ってなどいないふりをつづける憐れな男

3階の室まで連れ戻してくれる伝令をいまも待っている

はじめっからまちがっていた人生の意味、そして解釈

憎しみだけがほんとうであとはあざけりだけだとおもっていたころ

あれからもうひとまわりしていまだわたしはわたしを赦せない

ふるい帽子に晩年と渾名して、貌を隠して過ごしたい

なにもかも忘れて失踪者として死にたい

ここまでやって来た虚無の所業、

表現も生活もまともじゃなかったんだ

行き倒れた道を、生き直したい

そうおもうのもつかのま、

地下鉄が到着して、

そいつに乗り込むんだ

無名の一市民として、

そして列にならんで検品される

終わらない恐怖や、

過古への執着なんかと一緒にくたにされ、

わたしはまたしてもきみのかげを追いかける

わたしはきみを上書きしたい

けれどもそれに似合った存在がいない

いや、知らないだけでどこかにいるはずだ

でもそれに出会うのはとても怖いことで、

とりあえずは長い悪友——アルコールを使って、

静かな眠りへと階を降りることにしよう

きみにさよなら、

きみにありがとう。

ことの終わり

レイモンド・チャンドラーの猫

レイモンド・チャンドラーの猫はタケというなまえだったのだが、来訪するアメリカ人たちの発音によってタキとゆがめられ、

図らずも、**bamboo** から **water fall** へと変身を遂げた

われわれはなにかを誤解すること、

おもいちがうことによって、

世界というものの真に近づくのである

『イギリスの夏』——午後は長い

永遠だとジョン・パリントンはおもう

それはまさにイギリス人とおなじくつづくのだ

「アメリカ人特有の咽頭音ってやつがふり返って来たのさ」とかれはいう、

「長い冬眠から醒めてね」って

どこにもトポスを持ってない、

われわれの世代

悲しい一撃を求める孤独の果てで

われわれはきみをもういちど抱きしめたい

われわれは猫のなまえのように変容するなにかでしかないのだから。

あ
と
が
き

とうとう40男になってしまった。鰥夫暮らしの不安から、なにかと冷や汗が絶えない。わたしは将来、独居老人として果ててしまうのがわかっている。それにいまの物件に生涯棲めるわけでもない。築年数を考えれば、いつか追いだされて路頭に迷うのが見えている。そんな情況のなかで、いま第2歌集のために詠み、かたわらで音楽をやっている。綱渡りのような生活だ。どうしたものか、わたしの人生には身近な存在が乏しい。なにか危機に遭っても助けてくれるものがいない。言語表現によってむしろ、疎外が顕在化したとしか云えない。

文藝活動を短歌に絞るため、去年からほかのジャンルを完成させてきた。長篇小説、中篇小説、掌篇小説が終わり、次が詩の番になった。2年まえに書いた『夜の雷光』を起点として書き下ろした。いまのじぶんが注ぎ込めるものを十分に注いだつもりである。おもえば8歳から詩を書いてきた。それにしては詩の世界に発展がないと云われるかも知れない。しかし現代詩のなかでわたしという存在がいられるぎりぎり、際のきわは過ぎてしまった。今後は歌人としてやっていくつもりだ。三十一文字の呪学に賭けてみたいとおもっている。

この詩集のなかでわたしは3度の絶頂を迎えた。『食卓をめぐるダンス』、『なまえ（overwriting）』、そして『レイモンド・チャンドラーの猫』だ。この詩集をじぶんにとって完全なものにするためにこの3つは必要だった。言語の構築と解体、詩文学への決別、そして批評的視座。記憶が正しければ、いぜん寺

山修司は植草甚一との会話を引いて《三島はどうして落ちをつけたがるのだろう。舞台なんて幕が落ちりや勝手に落ちがつくの。じぶんで愉しまれちゃった感じだね》というかれの発言から、《それはそのまま三島批評に通じるものだった》と書いている。わたしの詩もわるい意味に於いて落ちをつけてしまう癖がある。演技・演出の過剰さがいつもつきまといつていた。そんな言語行為をいつまでもつづけるのははしたない。

だからこそ、ここで退場することに決めた。詩をやっていたからこそ出逢えたひとたちの多くに、いまさらながら感謝するいっぽうで、たかが詩を書くためにまきぞえにしまったものたちのために申し訳なくおもっている。この業腹なわたしをどうか赦してくれとはいわない。むしろ、忘れ去って欲しい。今後も詩文学はわたしを誘惑しつづけるだろう。「あいつよりも巧く書ける」というわるいささやきに首をふりつづけるだろう。でも、わたしは書かない。この詩集もやはり「去りゆく一切は譬喩」であることを免れないだろう。けっきよく、そのことを胸に置くだけなのだから。いままでわたしが味わって来た「不适当刺激」、その劇化をいま終える。じゃあね、さよなら、バイバイ。深夜のハイパスから嘔きだされた車たちがフラワーロードを下っていくよ。

’24年 夏 なかたみつほ

解題
*
*
*
*
*
花島大輔

*

本作『不／適／当／詩／劇』は前作『Sideorder』に続く中田満帆の第5詩集である。収録作品はすべて書下ろしのこと、『Sideorder』が出たのが、22年、2年前であるから、まず堅調な出版ペースといってよいだろう。一読、作風に大きな変化は見当たらない。『Sideorder』は散文脈と語彙の装飾性を意識的に取り入れた意欲作であったが、通底する詩的感性は以前から一貫していて、それは本作でも同様である。それがかならずしも停滞やマンネリを意味しないところに、中田の詩の持つ固有性と、詩の発動する必然性といったものを窺い知ることができるが、このような妥協や逸脱を許さない厳しい内省を、自己を確立することの困難な時代にあって弛まず維持しつづけてきたことに、あらためて驚かされずにはいられない。それはおそらく相応の代償なくしては辿ることの出来ない道程であったにちがいない。

それゆえ、新たな詩集を読み終えて、作者がここに至るまでの間に一体どれだけ多くのものを葬り去らなければならなかったかを思うとき、胸に去来する感慨は無邪気なものではありえない。

ぬけ殻になった剥製言語をいかに操作するか、といった技術を競うだけの昨今の詩とは違って、血の通った言葉で書かれた中田の詩は、われわれの精神へと呼びかける、その直截性と暴力性においてひとときわ際立った力能を示しており、「孤独とは何かを訴えたい」という衝動のうちにある」ということを証して、いつでも刺激的である。

これは詩ではない、――傷痕なんだよ。

ただ中田自身は、私信の中で「自己模倣の色が濃くなつて来た」として、「おなじ譬喩、おなじロジックの使い回しが出現して、じぶんでも限界だと感じている」と述べており、自作についていくらか懐疑的な見方をしているようである。もともと中田の詩のスタイルは、兌換不可能である

反面、そのふんだけ「進歩」や「成熟」といった観念とは相容れないものであるから、いずれそうした限界に突き当たることは、おのずから約束されていたようなものである。「すぐれた作品は多くの場合、未来を予見するよりも過去を清算するものである」というエリオットの言葉を思い出して慰みとしておくほかはない。

意味は敵だ、

人生は接続詞だ、

*

思えば中田は最初から完成された詩人であった。その出版を飾った第1詩集『終夜営業—Open 24 Hours—発送受付』の時点で、独自の詩のスタイルは確立されており、のみならず、そこではみずからの詩の根拠と可能性、そしてその行方と限界までもが予告されていた。

空間や時間の四隅で

おびえているものがいるということ

人生の、

人生のために失いつづけ、

いっぴきの猫が馳せのぼる階段、

その半分に腰かけてみよう

ほら、

なにがみえる？

基調にあるのは社会から脱落した疎外感であり、またそうしたおのれ自身にたいする違和感であり、その二重に屈折した心理の襞を、ときには緻密に、またときには乱暴に、あますところなく紙上に曝け出してきた。本質的には内気で柔和、鋭敏な魂の持ち主であると思われるにもかかわらず、生来の繊細優美な抒情の世界に安住することを拒んで、非情で苛酷、荒廃した裏面の世界へ、みずからの手でみずからを追放したのである。その反逆の身振りの奥底には、しかしながら潔癖な倫理が内包されていて、それがあつた時

には攻撃的な形で外化され、またべつの時には自己懲罰の響きを帯び、その観念の純化する深度にしたがって、読んでいるこちらが息苦しくなることもしばしばである。いくら露悪的に振舞ってみても、けっして悪人になり切れないのは、おそらくはそうした生得の資質のゆえだろう。

社会の裏通り、闇夜の匿名のざわめき、とりかえしのつかない〈生〉の暗部。それらはわれわれの日常から距ったどこか遠い場所の出来事ではなく、つねに、そこに、われわれのすぐ身近にぼっかりと穴をあけている。「錯覚の魔力がつきるとき、人生がゆるぎはじめるとき、そのとき、根底にあった絶望がたちどころに姿をあらわす」ように、われわれの存在そのものが、すでに自体的に無数の穴に穿たれているのかもしれない。「孤独とは、同胞たちからなる集団性の剥奪ではなく、自我から自己への宿命的な回帰なのだ」とすれば、実はその「穴」とはわれわれの異名にほかならないかもしれないのである。

中田の転身の契機が何であったのか、実生活での挫折に由来するのか、たんなる文学的意匠のひとつにすぎないの

か、いまのところぼくには知る手立てがない。いずれにしても、われわれの時代は無垢な夢を育む者には容赦をしない。「個人の外形的矮小とそれに比例した内面の病的肥大化」が近代人の特徴であるとすれば、あるいは中田はあまりにもモダンを生きすぎたということになるのであろうか。

うち棄てられたもののために語ることがあるなら
まずまっさきに火について語ろう
かつて愛しかったもののためにも
かつてすれちがったもののためにも

*

中田の創作活動は詩にかぎらず、短歌、小説、絵画、音楽、写真と多岐にわたるが、それらを総体的に眺めたとき、そのいくらか無秩序な乱雑さも含めて、意図してそこに入り込んだというよりは〈強いられる〉ないしは〈選ばれた〉といった、宿命的な業を感じさせるものがあるように思う。

少なくとも中田にとって、創作はレジャーや教養、あるいは業余のすざびといった功利的な慰安、パスカル風にいえば「暇潰し」とは無縁の事柄のようである。趣味における満足感でも労働の場の無気力でもなく、われわれはそこに「呪われた詩人」通有の受苦を見ることができであろうし、苦痛が救いであると同時に救いが苦痛であるといった、いわば神学的な逆説を連想することも許されるであろう。ブレイクは「自分の愚かさを主張する愚者は賢くなる」と言ったそうだが、おのれの非力、不適格性を表現することが、はからずもその豊饒さを証明しているというのは、はたして中田の栄光であるのか、どうか。

詩はかならずや中断されるべきものだ

覘きこむのではない

ふれるためにそれはある

いったい、どれほどの狂気に対価を払ってきたのか

*

中田の詩の発生源はその独特な感受性に拠るところが大きいが、それは実地から学ばれたものであるのはもちろん、その自己形成には直接間接を問わず、さまざまな文学思潮からの影響や示唆が認められる。そのさい「Starving hysterical naked」という面に注目して、ビートジェネレーションを近親者として連想するのは自然であるし、また正當でもあろう。だが、中田の場合、ビートのような宇宙的ビジョン、求道的博愛主義といったものは希薄で、またビート特有の人的交流、集団性とも絶縁しているところからして、その孤絶はより徹底していると言える。いぜんなにかで「アメリカは精神風土として〈移動〉の観念が根強い」ということを論じた記事を読んだ記憶があるが、中田の詩には、それとは逆に、ずっとおなじところで足踏みしているような苛立ちと焦燥、出口のない閉塞感といったものが濃厚で、それは本詩集でも「夜の雷光」などによくあらわれているはずである。

ともかく道のわからない時間があまりに多すぎて、
じぶんの痛みさえ、

遠い過去みたいにインターの出口をさ迷ってる

さらに比較を続けるために、ここに、おそらく中田がもっとも影響を受けた作家のひとりであろうブコウスキーの名を加えてみると、改めておおきくクローズアップされてくるのが、彼我の性へのアプローチの差異である。こうした方面に関して、見たところ中田はかなりの奥手なようで、いくぶん陰湿、粘質性の固着が認められるが、その反面、ビートやブコウスキーに見られる性の開放性、至高性などの要素は皆無である。これもまた作者の気質や経験と連動したものにちがいない。もっとも、われわれ日本人の民族的ないしは人種的な虚弱体質を思えば、とくべつ中田が特別な症例を示していると考ええる必要はないかもしれない（なおブコウスキーの影響については、本人からの暗示によると、詩よりも小説の方がその度合いは強いようである。浮浪者、犯罪人、中毒者といったドロップアウトした者たち

への選好、ヘミングウェイ風の乾いた文体、深みのないストーリー展開など、ちよつと思いつくだけでもたしかに類似点は多い。

「深みのなさ」について付言すれば、たとえば「職探し」というプロットがその典型を示すように、登場人物たちの交流はあっても、それは刹那的、その場限りのものにすぎず、それゆえなにか行動や事件が起きたとしても、それは心理的な葛藤まで達することなく、きまって表層的、即物的に解決されてしまう。かれらの小説をいかにもB級、パブル向きにしている要因のひとつには、そうした行動主義があると思う。両親との軋轢、幼少期・学生時代の不遇など、両者には伝記的事実にもまた共通点があるようだが、いまのぼくはそれを確証するだけの資料を持ち合わせていない。

かれは栄光を勝ち取って、

おれは負けつづけ、

やがて稲妻に打たれる

こうした内向性と虚弱性、そして厳しく制限されたパースペクティブによって、おそらく中田は、わが国の私小説の系譜にも遠からず連なるものであるだろう。生活破綻者で、およそ実利的なことは何一つ出来ないかわりに、周囲に迷惑をかけることに関しては誰にも負けない――、こうしたかつての「文士」の姿を、現実の中田と重ね合わせてよいのかどうか、じつのところぼくは知らない。幸か不幸か、実生活上の交渉がまったくないからである。それでも、アルコール依存の困難、無職による経済的不如意、家族との不和、さらには「自殺を疑われ警察に通報された」などという逸話を聞けば、たとえ私立探偵を雇わなくとも、その生活基盤が円満でないことくらいは推理できるのである。

なにかをつくりあげようとして

そのためにおおく碎き

おそれとらみとふるえを育んだ

すべてみずからの撰びとった札

町へでてみれば星ですら質札はある

もちろん、ゴシップ的な暴露をいくら積み重ねたところで、それが作品とどの程度有機的なつながりを持つのか、またそれが作品の享受と鑑賞にどれほど有益であるのかは定かではない。変な予断を与えることでかえって有害だということもあるだろう。ことさらに「作者」についての文学的公式を持ち出すまでもなく、作中の「わたし」を安易に作者のプロフィールと同一視することには注意深くあらねばならない。どんな告白型の詩人であっても、作者と作品はいわば鏡像関係を結んでいるから、どちらが本体であるかなど知れたものではない。文学史を繙けばわかるとおり、じぶんの書いた作品に喰い尽くされた詩人だって存在するのである。

こうしたことに関して、中田自身も自覚的に考えているようで、アンディ・ウォーホルの《もしアンディ・ウォーホルのすべてを知りたいならば、僕の絵と映画と僕の表面だけを見てください、そこに僕はいる。裏側には何もない

んだ」という言葉を好んで引用している。意味の地平を基礎づける審級としての主体を放棄し、経験の領土を外在性へと切断することは、不定の文脈をそのつど生き直すことにほかならない。複製され、改竄され、誤読されることによって、われわれの生の営みははじめてその真実を明らかにするのである。

なんにもいえなくなるまえにこれだけはいおう

すべてのぼく、ぼくというぼくはうそであると。

*

「表面」であるがゆえに、中田の作品はつねにへわたしを俯瞰視しようとする欲望を保持しており、どこことなくキーフレームによって操作されているような、いわば映画的なニュアンスを思わせる作品が少なくない。また、本詩集で言えば「夜の雷光」、「暗がりて手を洗う」など、独白を回収するもう一つ（別の階層）の声によって結末がつく、

というのも、中田の詩に頻出する構成のひとつだが、これなどは結果としてロマン主義的自己耽溺を解毒する効果があるようだ。切断され、縫合され、空隙を裡に抱えた声の複数性。そのダイアレクティックな自己内対話は、ある面では韜晦ないしは道化にも通じており、じじつわれわれは中田の詩から韜晦や道化、のみならず反語的な省察や倒錯した社会批評を容易に拾いだすことができるはずである。

もしかしたら、中田が忌避する「おなじロジック」とは、こうした例を念頭に置いたものであったのかもしれない。それはともかく、こうした思考法を中田が体内化したのはなぜであろうか。性分に合致したから、と言ってしまえばそれまでだが、ぼくの考えでは、それは決断や断定を宙づりにするため、といった消極的な意味から選ばれたものではなく、おそらくは「変身」と「逆転」の契機を裡に孕んでいるという、その動的な可塑性のためであり、それは強いコミットメントへの意志によって支えられている。そのためかどうか、中田の詩は、いっけん激情的、扇情的な言葉が使われていても、その声調はつねにクールであり、白

熱や陶酔よりもむしろ沈着、陰鬱という印象を受け、なかには分析的な理知の冷たさを感じる作品さえある。喧騒と狂熱の底にはいつだって淋しい横顔が隠されているのだ。

わたしはわたし自身の中にけだものと天使と狂人をいだいている。わたしの探求は彼らの征服と勝利、妥協と反逆にある——ディラン・トマス

*

自他への愛憎のコンプレックスがべつの位相であらわれたサンプルとして、ここで「なまえ（overwriting）」を取り上げてみよう。この詩からわれわれがまっさきに受けるのは何であろうか。沈黙のなかで自足してられない繊弱な魂の痙攣であろうか、それとも宛名を奪われた灰塵の告白であろうか。素直に読めば、失恋相手への恨み言といったことになりそうだが、満たされることのない「きみ」への呼びかけが、そのまま反転して「わたし」の不充足を

招来してしまうという、その依存性に特徴がありそうである。不思議と「きみ」の具象性は乏しく、それは作品構成上要請された面もあるには違いないが、それが極度に抽象化されているために、われわれは随意にさまざまな存在に仮託、転位して読むことができるのである。たとえば「きみ」を「仮想された読者」として読んでみてもよいし、「詩をやめる」と公言している中田のことであるから、「きみ」を人格化された「詩」として解釈するのもまた一興であろう。それらのいずれにしても、そこでは他者という絶対性が了解されていて、それをおしすすめていけば、終局的にはどこかで〈へ神〉のごとき存在と逢着するはずである。

そのような存在へ呼びかけるとき、すべては裁かれていると同時にすべては許されている。われわれがこの詩から「厳しさ」と「甘さ」という、いっけん相反する心理の傾斜を受け取るのは、そうした構造が内在しているためではないかと思う。

きみがきみだけがほんとうの瑕疵

*

ところで、さきほどいくつか名前を挙げた中田の先行者たちが、おおくは「無技巧」ないしは「無技巧の技巧」で書いていたのに対し、中田はこと技法に関しては、かなり意識的に取捨選択していることは注意されてよい。その点、「百のヘボ詩と一篇のすぐれた詩を書く」と決心したというブコウスキーの濫作主義とはおのずと異なるようである。いちふ不可解な漢字の当て方など、語の用法に関して偏執的なところが見受けられるが、それもこうしたことと関係がありそうである。中田のような極度に鋭敏な感性の持主が同時に高度なテクニシャンであるというのは面白い現象で、「裸になること」と「身を装うこと」の、赤裸と虚飾の、その矛盾の統一、統一の矛盾に、われわれは詩の特権的認識をみるべきであろうか。

中田はあるところで、参考、下敷きにした詩（人）とし

て、わが国のいわゆる「戦後詩」、そして「田村隆一、嵯峨信之、チャールズ・ブコウスキー、アレン・ギンズバーク、リチャード・ブローティガン、レイモンド・カーヴァー」など具体的な名前を挙げ——寺山修司が別格なの言うまでもない——そのうえでそうした嗜好が **Out of date** で、いまの時流とは疎遠なものだと自認することがあった。情勢論は多くの苦手とするところだが、日本の詩人はだいたいが根無し草のようなものだから、かりにどこかで流行やトレンドが宣伝されているのを見かけたとしても、無視して一向に差し支えないものだと思う。

すぐれた詩はある、その模倣もある、だが継承・発展はない——、わが国の近・現代詩から、われわれが学べるものというのは、せいぜいそうした不毛な反復だけであろう。吉岡実のような超時代的な美学の持主は別として、どんな著名な詩人もその影響の射程は驚くほど短い。そのため各人はみずからの系譜をつど作図し直さなければならぬのだ。それに、そもそも一般論として、たとえ古めかしいものであっても、それがわれわれの生の実質を失わない限り

は、いつでも新しい価値を見出すことができるはずである。逆に「現代性」というのが過去の否定、断絶をしか意味しないとしたらこれほど無意味なことではない。保守と革新を反対概念と考えるべき謂れはないし、じじつ中田の詩の新しさはそのことを立証している。「あれかこれか」という二者択一の議論はそこのおおくが思想ないしは現実の貧困から生じる。

もってるものが手折れた茎ならば

それがきみの最良の武器だ

たとえきみが素裸であろうとも

そいつがきみの標べ

わらべ唄をうたい

プールサイドに立つきみが羨ましい

きみはいま最良の存在だ

(たとえここに言の葉がなくとも)

中田が如上の詩人たちを鼻屑にするのは、なにかしらを

共有、分有していると直感しているためであろう。たとえば田村隆一が自作「立棺」を説明して、「へ立棺」はある世界を意味する言葉なのです。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと大きな連からなりたつこの詩は、ある世界にひとつの意味を与えるために、それぞれ、失業者と亡命者と病める者との心から光りをあててみたのです。人間が死ぬことのできない世界は、生きることのできない、個人はあらゆる部屋、あらゆる都市、あらゆる土地から追われて、ただ数の中に漂う世界、へわたしゝもへおまえたちゝも、ただへわれわれゝのヴァリエーション(変化)にすぎない世界、これがへ立棺」という言葉から挑戦を受けたわたくしのテーマなのです」と述べているのを読むと、時代と世情の違いを超えて、中田の詩と共鳴するものを受け取らずにはいられない。

「失業者と亡命者と病める者」とはあまりにもお誂え向きすぎて、かえって不審に思われそうではあるが、そこにおのれの命運を重ね合わせることを、きつと中田なら否定しないはずである。ひとによってはこうした観念が大時代的で空疎、大仰なものに見えるかもしれない。だが訳知り

顔をする前に、われわれは「人間が死ぬことのできない世界は、生きることできない」という言葉の意味を問い、その上であらためてみずからの内面世界を省みることから始めるべきであろう。

こうした所からもわかるように、中田は無防備に、自然発生的に詩を書いているわけではない。いっけん無頼なようにでいて、じつは寡黙な勉強家なのである。ぼくの知っているかぎりでも、硬派な本をなかなか旺盛に読破しているらしい。それでも、どこまでいっても独学者の風貌がつきまってしまうというのが、いかにも正規の教育から落第した中田らしい表徴で、われわれは現行の教育制度の欠陥にその責任を求めるべきであろうか、それとも「教育は必ず失敗する」という本質論から問い起こすべきであろうか。それはともかく、何を学んでも、その吸収、消化にあたって、けっして生硬にならず、身丈にあわせる融通さと、巧みな処理能力を持ち合わせているところに中田の面目がある。なんによらず勘所の掴み方がうまく、それでいて器用貧乏というわけでもない。

「ステップを気にしているうちは自由に踊れない」という言い回しがあるが、なんといっても中田は言葉の舞踏には天性の才を持っているのである。おおくの三流詩人が言葉の多義性、曖昧さに凭れて書いているのに対し、中田はそれを限定し、裸形にし、嗜虐する。その手捌きが卓抜で、たとえ現代詩風の修辞を使ってみても、中田の場合、言葉は享樂へと消費されることに抗い、たえず意味の方へと傾度を増していく。そこに秘められた不拔の信念を見逃してはならない。言葉というのは、われわれにとって、つねに欠如しているか、過剰であるか、不条理なものにほかならず、だからこそ愛さずにはいられないものだからである。

**すぐれた詩を読んだ時の衝撃の底にあるものは「いままで
の世界に欠けていたもの」という実感だ——鮎川信夫**

*

この世界の欠損を埋める詩人の存在を予感していながら、

しかしそれを見つけ出す方途のないときに、ぼくは偶然中田の詩に出会った。それが驚きと発見の喜びに満ちた邂逅であつたのはいうまでもない。「同時代」という目印も道標もない薄闇のなかで、そのような詩人を手探りで発見できたのは、いま振り返っても僥倖であつたと思う。しかしそれもすでに十数年も前のことである。もはやそのときの心の動きを再現することなどできないし、本当をいえば、当時あつた出来事の、そのほとんどは忘却の底に沈んでしまっている。

日常に埋没していると十年などは瞬く間に過ぎてしまう。そのあいだにぼくと中田それぞれの運命も変転したはずだが、病室、独房、未開封の督促状、不眠と失意のながい夜――、と、おのおの閱した来歴はおそらくは似たり寄つたりであつたろう。それらがわれわれになにを与え、われわれからなにを奪い去つたのか、貸借表の損益は未確定のままだが、一つだけ言えることがあるとすれば、そのあいだもおたがい詩への興味だけは変わらずに持ち続けてきたということであろう。その一点のみで、今日までかぼそく

も繋がってきた。

ぼくがいまこれを書いているのも、そうした因果に導かれたまでのことであつて、ぼくが中田の詩を論じる適任者だからというわけではない。こちらの知力や学識の不足はむろんのこと、はじめからぼくは中田を崇拜する者ではないし、また非難する者でもない。いぜん連名で原稿を書いたこともあるが、だからといって共犯者というわけでもない。そもそも詩を書くこと、また詩を読むことは、逸脱、介入、未知の領域への脱自であるから、本来それだけでも危険なことであるし、場合によっては反道徳的な行為でもある。であれば、詩を論じることの不可能性をわれわれは甘んじて受け入れるべきということであろうか。

こういう疑念はあまりにも理念的で、現実離れした、偏頗で窮屈、弁明的なものに聞こえてしまうかもしれない。詩を取り巻く言説には、批評はもとより、空疎な賛辞や社交辞令、形式的な饒舌には事欠かないというのが、われわれがじつさいに目にする光景だからである。しかし、相互

承認と投機の道具としてしか詩を論じる言葉を持ちあわせていないというのは、われわれにとって不幸なことに違いない。詩に無関心の多数の人間と、詩に盲目となった少数の人間しかいないとなれば、絶賛されるにしろ、酷評されるにしろ、あるいは黙殺されるにしろ、どう転んでも不愉快な思いをさせられるのは必定であろう。この詩集がどういう扱いを受けるかは、ぼくの与り知らぬところだが、これから中田はその不愉快さを従容と忍ばなくてはならないだろう。

詩人には二つの年齢がある。^{ホエジ}詩が、あらゆる点で彼を虐待する年齢と、詩が熱烈に抱擁されるままになる年齢と。だが、どちらも完全には決定されない。そして後者が至上のものというわけではない——ルネ・シャール

なお先にも少し触れたように、中田は本詩集を最後として、こんごは詩から距離を置く算段でいるらしい。まだ身辺整理を始めるような年齢ではないはずだから、そのふん

のエネルギーをほかにまわすということだろう。

直近に書かれた『レイモンド・チャンドラーの猫』は、本人曰く「最後の詩」とのことで、そういう意味でも注目作といってよい。かれの詩作の総決算と見做せないこともないからである。こうした優れた作品を論じるのは難しく、せいぜい「完成度の高さがむしろ欠点になっている」といったほとんど無意味な蛇足を付け加えるくらいが関の山であろうが、われわれはここに詩人・中田満帆の到達点の一例を見るはずである。

*

こうしてわれわれは最終的に中田の詩の経歴を一望できる位置に立つことが可能になった。と、ここではからずもひとつの疑問が浮かんでくる。——詩人・中田満帆はその活動をまっとうしたのだろうか？ ぼくはかなり疑わしく思うが、むろんこれには正答などあるはずがなく、われわれが本書および過去の詩集を読みかえしていくなかで、おの

おのが判断を下していく以外にないであろう。「作品」はわれわれ読者の時間を食い物にして生き延びていくものであるし、でなければ、時間がさきに「作品」を消尽してしまうだけのことである。それに、完成した詩人として始まった中田がさいごには未完成なままに終わったとしても、あながいそれはそれで本望であつたといえるかもしれないのである。

チャンドラーの飼猫の名前は知らなかったが、かれの創作ノートに残されていたという小説の題名案ならぼくもひとつ知っている。――**〈Everyone says Goodbye too soon〉**。

悲惨から、病気から、憂鬱から、すべてから癒えるために欠乏しているのは、ひとえにただ「仕事の愛好」のみである――ボードレール

*

一冊の詩集の誕生を見届け、さらにそこに一文を寄せることができたというのは、ぼくにとってかけがえのない貴重な体験であつた。とはいえ、言うべきことのおおくを書き落としているにちがひなく、また伝えるべきことのおおくが胸につかえたまま、ということもなかったとはいえない。どんなに大げさに聞こえようとも、詩（集）はわれわれのもとに届けられた、詩人からの贈与である。だからこそ、それに見合うだけの返礼をわれわれはいつでも用意しておかなければならない。しかし、中田の詩業はその断固たる姿勢で、軽率な好悪や打算的な追従の一切を拒絶してそこに屹立している。ぼくは嘆息とともに、ささやかな一瞥をあたえたにすぎない。祝福の花束は不要であろう、かといって弔辞を述べるにはいまはまだふさわしくない。

*

中田満帆 なかたみつほ／’84年生まれ、兵庫県神戸市・出身在住。’04年より詩人・童話作家Ⅱ森忠明に師事。文藝を学ぶ。定時制高校卒業、職と場所を転々とする。郵便配達夫、一般土工、倉庫係、浮浪者を経て、’14年、出版局「a mis sing person's press」を立ち上げ、詩集『38wの紙片』を刊行。そのほかジャンルを越境した活動をする。’19年に第1歌集『星蝕詠嘆集／Eclipse Arioso』を刊行。’22年より歌誌『帆(han)』を主宰以後、歌人として活動。

花島大輔 はなしまだいすけ／’80年、千葉県生まれ、東京都在住。死亡年月日は不詳。学歴、職歴、病歴、犯罪歴、どれもいうべきものはない。計画していたハート・クレイン論が頓挫したため、文学上の履歴もいまだ空白のままである。歌誌『帆(han)』初号より、批評・評論にて参加。



不／適／当／詩／劇

copyright © 2024 a missing person's press, Mitzho "Mampan" Nakata

2024年08月03日・初版発行

題名・題字／森忠明

序文・解題／花島大輔

著作・編輯・写真・装丁／中田満帆

発行／中田満帆

発行所／a missing person's press

〒651-0092 兵庫県神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

[電話] 078-200-6874 [MAIL] mitzho84@gmail.com

ISBN978-4-9909502-9-3 C0092 ¥2500E

Printed in Japan

Made in Kobe